

Centro di Ricerca sulla Pittura Murale Italiana, Università di Kanazawa

# Newsletter

金沢大学 フレスコ壁画研究センター

Vol.6

March 2013

◆ [南イタリア中世壁画群診断調査プロジェクト]

## 2012 年度フィールド調査

- \* 近年発見された教会 (グロッターリエ)
- \* グラヴィーナ・ディ・リッジョ東教会 (グロッターリエ)
- \* サン・ニコラ教会 (パラジャネッロ)
- \* グラヴィーナ・イン・プーリアでの追加調査：空撮
- \* グラヴィーナ・イン・プーリアでの成果報告会と交歓会
- \* 「日伊文化財協力事業ワークショップ」をフィレンツェで開催

◆ [日伊教育研究連携事業]

フレスコ壁画の修復に関する講義と実習：パック洗浄法

◆ 研究者の横顔 第6回

歴史を歴史の重みの下敷きにしなないための文献・史料発掘

◆ コラム第6回 私のおすすめフレスコ壁画

シエナ政庁舎に描かれた「善政と悪政」

◆ [写真展&講演会]

ルネサンス美術の源流を求めて

◆ 連載 フレスコ八景 第六景 パルマ

サン・パオロ尼僧院 院長室の壁画装飾



## 南イタリア中世壁画群診断調査プロジェクト

2012年度フィールド調査 2012.9.5 ~ 9.17

## 調査対象

<p>(1) 近年発見された教会 (グロッターリエ)</p> <p>N 40° 31'59.4" / E 17° 25'52.42"</p> <p>旧市街地の南東にあるカステッロ・エписコーピオ (14 世紀に建設されたターラントの司教館) 近くのクレスピ通りにある。2008 年に陶器店 (ヴェスティータ) の主人が購入した家を改築したところ、地下の台所にあったパン焼き窯の背後から中世洞窟教会の祭壇が現れた。3つの壁龕の中央には「パントクラトールのキリスト」、左側には「聖ニコラウス」、右側には「聖女バルバラ」が描かれている。保存状態は奇跡的によく、彩色も非常によく残っている。「聖ニコラウス」に斜光線を当てると、顎鬚を含む顔や目の輪郭にインチジョーネ・ディレッタの鋭い引っ掻き線がはっきりと現れ、ルネサンスのフレスコ画法に向かう壁画技法の展開上きわめて興味深い。</p>	<p>Chiesa di Casa Vestita (Grottaglie)</p> 	
<p>(2) グラヴィーナ・ディ・リッジョ東教会 (グロッターリエ)</p> <p>N 40° 33'52.8" / E 17° 24'27.4"</p> <p>リッジョ峡谷を挟んで東西に向かい合った2つの洞窟教会があり、東側の急な斜面を掘り抜いたこの教会は「東教会」と呼ばれている。「サン・サルヴァトーレ教会」であったという説もあるが、定かではない。農家の所有地で、峡谷に面した入口部分は大きく崩落し、ぽっかりと大きな穴が開いており、奥に2つの削り型後陣をもつ長方形の空間が広がる。10世紀頃に描かれた壁画の断片 (右側の後陣には「聖アンデレ」、左の祭壇には「パントクラトールのキリスト」、右壁面の上部には「居並ぶ7人の司教」) が見られる。壁画は2層、3層になっていて、さらに古い時代に描かれた壁画があったことがわかる。</p>	<p>Chiesa in località Gravina di Riggio este (Grottaglie)</p> 	
<p>(3) サン・ニコラ教会 (パラジャネッロ)</p> <p>N40° 36'10.5" / E16° 58'28.1"</p> <p>峡谷の南側にあるガッレオーネ農園近くに位置する。教会まで直接に行く道はなく、峡谷の河原を横切り、斜面を少し上ったところにある穴から仮設の階段を下りて入る。堂内は台形の平面プランをもつ小さな空間で、入口となっている西側以外の三方の壁面に壁龕が設けられており、東側の壁龕を後陣としている。13-14世紀に描かれた質の高い壁画が残っており、後陣の壁龕には「聖母マリア」「パントクラトールのキリスト」「聖ニコラウス」、その左側に「聖ペテロ」、南側の壁龕には「聖マッテヤ」が描かれている。その右側には「玉座のキリスト」が描かれていたらしいが、現在ではほとんど失われている。</p>	<p>Chiesa di S.Nicola (Palagianello)</p> 	
<p>(4) サン・ヴィート・ヴェッキオ教会、パードウレ・エテルノ教会 (グラヴィーナ・イン・プーリア)</p>	<p>Chiesa di S.Vito Vecchio, Chiesa del Padre Eterno (Gravina in Puglia)</p>	
<p>追加調査：空撮 ヘリウムガスを封入した気球 (商品名：ひばりは見た) にデジカメを取り付け、釣り竿で上空に浮かぶ気球をコントロールするという方法で2つの教会を空撮した。</p>		
		



## 実施期間 2012.9.5 ~ 9.17

本格的なフィールド調査としては2回目となり、ふつうなら多少の気持ちのゆとりができそうなものですが、新たな調査項目を追加したり、昨年度の調査地に対する成果報告の責任を果たす企画などを盛り込むと、ゆとりどころではなく、今回もまたイタリアならではのハプニングや天候の急変など、迫り来る幾多のハードルを乗り越えて、多忙なスケジュールをこなすことになりました。

### 近年発見された教会（グロッターリエ：Grottaglie）

おそらくは古代ギリシアに遡る陶器の町グロッターリエ、その旧市街地には伝統ある陶器店が軒を連ねています。ヴェスティータの店（工房）もその1つですが、4年前の2008年に自宅兼ギャラリーとして旧市街地の古い邸宅を購入して改築を始め、ほとんど使われた形跡のないパン焼き窯を崩したところ、その背後から3つの礼拝用の壁龕（ニッチ）をもつ礼拝堂が発見されました。中世では、ここも凝灰岩台地を掘り下げて建設された教会でしたが、やがて教会としての機能を失い、民家の1部として組み入れられ、意図的に隠されたか、時間の経過とともに忘れ去られたものと思われます。3つのニッチ内に描かれた「聖ニコラウス」「パントクラトルのキリスト」「聖女バルバラ」の壁画の保存状態はきわめて良好で、「聖ニコラウス」の顎鬚や目の周囲には漆喰がまだ生乾きのうちに鋭い刃物でつけられた刻線（インチジオーネ）が、私たちの斜光線を照射した調査で初めて発見されました。これは、陶芸の伝統技法と生乾きの漆喰を処理するフレスコ技法との間にある密接な関係を暗示しているのかもしれませんが。



陶芸家ヴェスティータ氏



散乱光で撮影したサン・ニコラ像



斜光線を照射すると鋭い刻線が見えてくる



刻線などの壁画表面の形状をRange5で精密に3Dスキャンして記録



教会堂内の3Dスキャン



壁画の描かれたニッチだけでなく、床面や天井まで教会堂内はすべて撮影して記録



ヴェスティータ家の中庭



### グラヴィーナ・ディ・リッジョ東教会（グロッターリエ：Grottalie）

リッジョ峡谷の東の崖を切りぬいた洞窟教会で、洞窟に至る道は険しく、牧羊犬に守られながら徒歩で各種機材を抱えて崖を下らねばなりませんでした。ここでの一苦労は、精密な撮影を行うために、ぽっかりと剥き出しになった洞窟の入口を完全に暗幕で遮光しなければならなかったことです。あらかじめ日本から用意していった暗幕を上から、下から、横からバランスよく引っぱりながら密閉する大変さを初めて経験しました。また、斜光線で浮き上がった壁画面は、2層から3層の壁画が歴史的に重層していることがわかり、壁面の 3D スキャナ Range5 の威力で、超精密なスキャンによる記録をしました。



機材はすべて人間が抱えて調査地まで運ばなければならない



正確な色彩再現には外光を遮断して LED ライトだけで照明する必要があり、崖の上から暗幕を吊り下ろして、洞窟の開口部を完全に遮光する



プーリア州文化財監督局のフルヴィア・ロッコさんも協力



Range5 による一連の壁面スキャン作業



スキャン前のキャリブレーション



大型三脚を適切な位置に固定してスキャン



スキャンからデータ処理までパソコンで制御





模写をする傍らで、周辺の温湿度を計測



凝灰岩を砕いて、模写用パネルの下地塗りとする



洞窟周辺の凝灰岩の硬度をシュミットハンマーで測定



模写とマイクロSCOPE担当班が調査ポイントを絞り込む



壁面色彩記録は、色差計によるデジタル測定と水彩絵具を用いたカラーサンプリング（アナログ記録）の2 wayで実施



調査地と金沢大学（角間）をビデオチャットで結んで遠隔授業



金沢大学チームの参加メンバーと担当

調査担当の内容	メンバー	所属
写真撮影（散乱光・斜光） 	宮下 孝晴	人間社会研究域 教授
	関谷 倫寿	人間社会環境研究科人文学専攻(文化遺産学)院生
	マッシモ・キメンティ	建築家(クルトウーラヌオーヴァ社)
3Dスキャン(建築空間・壁面) 空撮 	江藤 望	人間社会研究域 准教授
	宮下 明珠	センター研究員
	カルロ・パッティエニ	建築家(共同研究者)
壁面のマイクロSCOPE撮影 色彩計測 	真田 茂	医薬保健研究域 教授
	木村 仁美	人間社会環境研究科人文学専攻(文化遺産学)院生
壁面診断・環境調査 	五十嵐 心一	理工研究域 教授
	川窪 洸太	人文学類フィールド文化学コース学生
カラーサンプリング	皆上 小冬	人文学類フィールド文化学コース学生
セッコ法による模写制作	大村 雅章	人間社会研究域 教授
文献資料収集	宮下 睦代	センター客員研究員
全体のコーディネート	上口 大介	センター・コーディネータ

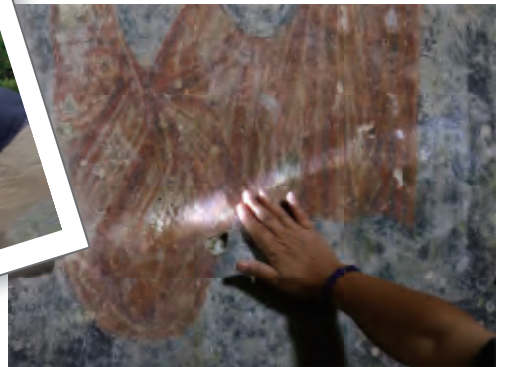


## サン・ニコラ教会 (パラジャネッロ : Palagianello)

干上がった峡谷の川底を渡って、崖を這い上り、洞窟の穴から応急にしつらえられた階段を下りたところに広がる空間が聖ニコラ教会です。しかし、建設された 13～14 世紀には教会を取り巻く周囲の地理的な状況はずいぶん違っていたようです。入口が崩落し、周囲に土砂が堆積し、アーモンドやイチジク、ブドウの木が植えられ、洞窟教会周辺の河岸段丘の姿は一変しました。この変化を証明して当手を再現するには、教会周辺のロケーションを広く 3D スキャンし直す必要がありました。また、堂内の壁画ではセッコ法でもなく、フレスコ法でもない、石灰画と呼べるフレスコ画法の誕生に直結したと考えられる石灰クリームの痕跡、それを壁面に塗りつけたと見られる手指の跡を発見することができ、今後の研究に 1 つの方向性が示されました。



往時の教会を再現すべく、周辺を広く 3D スキャン



壁面に石灰クリームを直接に塗ったと思われる指の跡を確認



地元の研究者ドメニコ・カラニャーノ教授と洞窟教会発見時の記録と現状を比較検証



各班の調査が一段落したところで全体ミーティング



### グラヴィーナ・イン・プーリアでの追加調査：空撮

昨年の調査地グラヴィーナ・イン・プーリアでの調査データは、独自のデジタルアーカイブとして構築中ですが、そうした作業の中で、教会周辺のロケーションとしての3D スキャンをしたにもかかわらず、上空からの空撮をしていなかったことに気づきました。小型ラジコンヘリや凧、気球など、空撮のためのさまざまな技術的可能性を検討した結果、ヘリウムガスを封入した気球（商品名：ひばりは見た）にデジカメを取り付け、上空に浮かぶ気球を釣り竿でコントロールするという方法を採用することにしました。角間キャンパスでの2度にわたるリハーサルは順調でしたが、コントロール用の釣り竿をもう1本増やしてもなお、峡谷上に発生する乱気流と無線シャッターのタイムラグに大いに悩まされることになりました。文化庁の建石調査官、香取係長、奈良文化財研究所の高妻教授も応援に加わってくれ、流されたり急落下する気球とデジカメを夢中で追いかけてくれました。



### グラヴィーナ・イン・プーリアでの 成果報告会と交歓会

昨年9月に調査したグラヴィーナ・イン・プーリアにおいて9月5日、6日の2日間にわたり、地元関係者や市民に向けて調査研究の成果を報告しました。今回の成果報告会は、昨年の現地調査に協力を惜しまなかった人々に感謝の意を表するとともに、中世の洞窟壁画保存（記録）の重要性を理解してもらうことを目的としています。

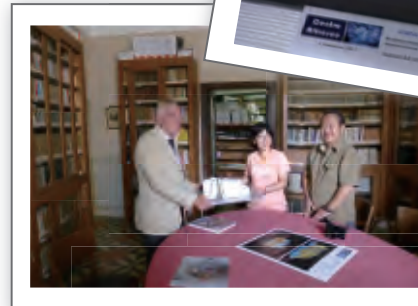
9月5日は、市主催の秋期連続講演会において、市長、文化担当官の挨拶に続き、宮下孝晴フレスコ壁画研究センター長が「中世洞窟教会に描かれた壁画の歴史的重要性」について講演、翌6日の本センター主催の研究成果報告会では調査研究の成果とともに構築中のデジタルアーカイブの1部も紹介しました。その後、調査に協力してくれた関係者とともに「折り紙」を楽しみながら交歓会が開催されました。また、壁画を移築して保存しているエットーレ・ポマリチ・サントーマジ財団博物館に、三次元スキャンデータによって精確に形成したサン・ヴィート・ヴェッキオ教会の樹脂模型（1/60）を参考展示用に贈呈しました。

今回のグラヴィーナ・イン・プーリアでの調査には、文化庁文化財部古墳壁画室の建石徹 古墳壁画対策調査官、奈良文化財研究所の高妻洋成 保存修復科学研究室長、伝統文化課文化財国際協力室 香取雄太 協力推進係長が同行し、研究成果報告会では建石調査官から「東日本大震災における文化財被害と文化財レスキュー事業」の取り組みについても紹介がありました。



パソコンで処理した 3D データと 3D プリントをつないで精確な模型製作

サン・ヴィート・ヴェッキオ教会の樹脂模型 (1/60)

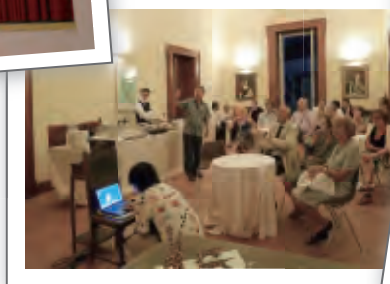


エットーレ・ポマリチ・サントーマジ財団博物館に樹脂模型を寄贈

9月5日の  
成果報告会



9月6日の  
成果報告会と交歓会



日本の「折り紙文化」をいっしょに楽しむ





文化庁連携事業

「日伊文化財協力事業ワークショップ」をフィレンツェで開催

フレスコ壁画研究センターは、文化庁文化財部古墳壁画室と共同で、日伊の壁画の修復保存に関する研究成果を共有すべく、9月3日と4日の2日間にわたり国立フィレンツェ修復研究所において、昨年1月に続き第2回目となるワークショップを開催しました。今回の目的はとくに、2011年3月の東日本大震災後の日本が抱える深刻な文化財レスキューに関する問題について、1966年11月のアルノ川氾濫によってフィレンツェが受けた被害後に展開された大規模な文化財レスキューの実績をもつフィレンツェ修復研究所の関係者と意見を交換することでした。

ワークショップは、宮下孝晴フレスコ壁画研究センター長の挨拶と司会で始まり、文化庁から伝統文化課文化財国際協力室の香取雄太 協力推進係長による事業概要説明、文化財部古墳壁画室の建石徹 古墳壁画対策調査官から「東日本大震災における文化財被害と文化財レスキュー事業の概要」、続いて奈良文化財研究所の高妻洋成 保存修復科学研究室長から「文化財レスキュー事業における水損文化財資料への対応」について報告がありました。

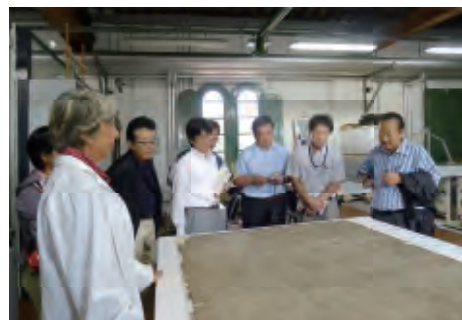
イタリア側からはフィレンツェ修復研究所のマルコ・チャッティ 所長から大洪水被害後の対応と修復活動の経過についての概要説明があり、続いてファブリーツィオ・バンディーニ 専任修復士から当時の文化財レスキューに関する、いくつかの具体的な事例報告がありました。その後、参加した約40名あまりの修復士や科学ラボの研究者たちとの活発な質疑応答や意見交換が行われました。

なお、ワークショップの前日には、大塚オーミ 陶業(株)大杉栄嗣 社長、櫻井烈 顧問も同行し、同修復研究所内や市内各所に点在する各修復ラボ（絵画、彫刻、紙、織物等）を視察し、修復担当者と現場で直接に意見交換を行いました。また、アルノ川沿いに建設された国立図書館の地下収蔵庫で水没した貴重な歴史的な文書の修復作業が、洪水後半世紀を経てもなお図書館附属修復室で継続されている状況を視察しました。

修復の現場を視察



絵画部門



紙部門



ゴブラン織り部門



サンタ・クローチェ教会大礼拝堂で継続されている壁画修復



日伊文化財協力事業ワークショップ



フィレンツェ国立図書館の附属修復室

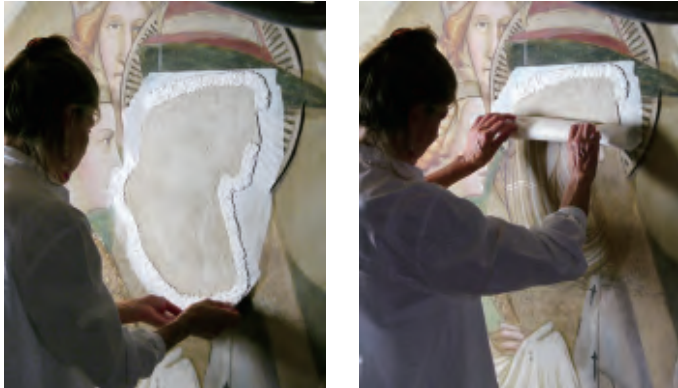




## [日伊教育研究連携事業]

## フレスコ壁画の修復に関する講義と実習：パック洗浄法

「日伊教育研究連携事業」として、本年度は国立フィレンツェ修復研究所の専任修復士パオラ・マリオッティさんを講師に迎え、人間社会学域人文学類フィールド文化学コース及び学校教育学類美術教育に所属する学生（30人）を対象にフレスコ壁画修復の講義と実習（パック洗浄法の集中講義）が11月13日～15日の3日間にわたって実施されました。



サンタ・クロッチェ教会の足場でパック法を施すパオラ修復士

■パック洗浄法（impacco）の実習では、あらかじめフレスコ壁画の表面に経年変化の汚れ（付着物）や後世の加筆（膠テンペラ）を想定した彩色を施しておき、それらをセルロースを主成分にしたパック材に炭酸アンモニウムを含ませたもので壁画表面から浮き上がらせ、同じ炭酸アンモニウムを含ませた綿棒や筆などで除去する一連のクリーニング技術が披露されました。パオラ・マリオッティ修復士の実演を見学したあと、学生たちはグループ別に講師から指導を受けながらパック洗浄を体験し、洗浄によって付着物の下から原作の描写が現れてくると、あちこちから驚きと喜びの声が上がりました。実際の壁画修復現場を彷彿とさせる強烈なアンモニアの臭い、簡単そうに見えながら意外に難しい綿棒の作り方などとともに、パック法で利用される化学的修復作業の背後には、炭酸アンモニウムや水酸化バリウムなどの薬品と難解な化学反応式の連鎖が横たわっていることも痛感しました。



① パック材に含ませる炭酸アンモニウム水溶液を作る



② 付着物が浮き上がった頃合を見てパック材をはがしていく



③ パック材を巻き取りながら、炭酸アンモニウム水溶液を含ませた綿棒で筆跡にそって洗浄



④ 全体の調子を見ながら、海綿に含ませた炭酸アンモニウム水溶液で洗浄



## 研究者の横顔 第6回

# 歴史を歴史の重みの下敷きにしないための 文献・史料発掘

フレスコ壁画研究センター 客員研究員 宮下 睦代

### Q. センターでの役割分担は？

「どうしても容疑者のアリバイの裏が取れない」とか、刑事ドラマなどで「裏を取る」という言い方がよく出てきますが、私の仕事は、この「裏を取る」ことで、まずは調査の対象となる洞窟教会の壁画に関する先行研究、そして、フィールド調査後には、そこから見えてきた新たな見解が研究史の中でどのように位置づけられるのか、新たな見解に対する妥当性の「裏を取る」ことです。

### Q. 「裏を取る」にあたっての苦労は？

調査対象の洞窟教会や堂内に描かれた中世の壁画というのは、一般の美術史全集などで紹介されるような有名なものではありません。それだけに先行研究も少なく、たとえ見つかってもローカルな雑誌に発表された論文で入手が難しく、結局はフィールド調査に出掛けた時に、地元の研究者に協力してもらって探すしかありません。あらゆる情報が飛び交うネット社会になったにもかかわらず、金沢にいてはどうしてもならず、どうしてもフィールドに出掛けていく必要があるということが苦労でしょうか。でも、その苦労から得も言われぬ喜びが生まれるのですが・・・

### Q. 「苦労から生まれる喜び」の実例があれば、お願いします

1950年代、プーリア州の洞窟教会に描かれた3箇所の中世壁画がマッセッロ法というブロック移動の方法で切り出され、博物館に保存されました。地元の新聞ではずいぶん頻繁に取り上げられもしましたが、なぜか学術的な記



◇所属: 金沢大学 フレスコ壁画研究センター  
◇専門分野: 文献資料の検索と考証  
◇研究課題: 南イタリアの洞窟教会壁画に関する資料収集

録はいつい地元に残されていないのです。壁画移動を担当したローマ中央修復研究所で当時の記録を閲覧させてもらいましたが、戦後まもなくのことで、記録は相当に大雑把で、正直なところ落胆しました。ところが、手がかりの糸を手繰り寄せていくうちに、壁画移動に関わった修復士の1人が存命であることがわかりました。83歳の生き証人から当時の「驚くべき真相」を聞くことができたときは、ほんとうに嬉しかったですね。

column

## 私のおすすめフレスコ壁画

### 第6回 シエナ政庁舎に描かれた「善政と悪政」

フレスコ壁画研究センター  
研究員 宮下 明珠

壁画空間を3Dスキャンするのが専門の私は、壁画を取り巻く印象的なロケーションとかインパクトのある主題という切り口で思いをめぐらせ、シエナの政庁舎、中世の国会議事堂であったプブリコ宮殿内の議場に描かれた「善政と悪政」(1338-40年)を私のイチオシとしました。中部イタリアのシエナは、007シリーズ「慰めの報酬」でも登場したカンポ広場で繰り広げられる競馬パリオ、キアンティワイン、絵具顔料



Photo: Mitsumi Miyashita

のシエナオーカー(黄土)で知られた都市で、その落ち着いた中世の佇まいは華やいだフィレンツェとはまったく別世界です。さらに驚くのは、7世紀を経た今も、シエナはアンブロージョ・ロレンツェッティの壁画「善政と悪政」に描かれた街並みそのままなのです。

政治の中枢である議事堂内に描かれたこの壁画は、活発な商売・教育・建設が行われて「善政の結果はこんな幸せな生活」が実現し、強盗・殺人・横領がはびこった「悪政の結果はこんなに悲惨な社会」になるのだという、執政者である政治家たちへの戒めです。リアルなイラスト描写にはとても説得力があり、こんな壁画に囲まれて議論していたら、政治家の腹黒い野心も少しはなりをひそめるのではないかと考えるのは、やはり甘い妄想でしょうか。



# 2012年度下半期トピックス & イベント

## 宮下孝晴教授が研究活動を発表

第5回 金沢大学未来開拓研究公開シンポジウム  
金沢大学150年 過去から現在、そして未来へ

金沢大学創基 150 年記念企画の一貫としてして、2012 年 11 月 1 日、第 5 回金沢大学未来開拓研究公開シンポジウムが金沢市アートホールで開催されました。本学が世界に誇る最先端の研究を発表するシンポジウムで、地元開催は 4 年ぶり。中村信一学長が「金沢大学創基 150 年—東アジアの知の拠点として」と題して特別講演した後、4 人の研究者がそれぞれ最先端に行く研究成果を発表しました。本センター長の宮下孝晴教授も、日伊共同プロジェクトとして進めている南イタリアの中世洞窟教会壁画のフィールド調査や、歴史的文化遺産を未来に継承するための先進的デジタルアーカイブ形成の取り組みを紹介しました。文化財の病院である修復研究所に運び込んで治療を施すことのできない壁画の保存と現状の記録は、それが描かれている建造物との密接な関係もあるため、壁画修復の先進国であるイタリアとデジタル先進国である日本が協力して、これまでにない壁画遺産の記録プロジェクトが開始されたのです。



## 本センターの壁画調査活動がイタリアの雑誌で紹介される

プーリア州の航空会社が発行している『ALI DEL LEVANTE』(2012 年 10 月号) 誌に、本センターが取り組んでいる「南イタリア中世壁画群診断調査プロジェクト」のグラヴィーナ・イン・プーリアでの活動が紹介されました。そこには 2 ページにわたって「東洋と西洋、プーリア州の壁画」というタイトルで、金大チームの調査風景の写真とともにプロジェクトの誕生経緯や目的、学術的意義などが紹介されています。そして、東洋における唯一のイタリア壁画研究拠点である本センターが、総合大学である金沢大学の力を背景として、これまで北イタリアを中心としたルネサンス美術ほどには注目されてこなかった南イタリアの洞窟教会に描かれた中世壁画に注目し、南イタリアの歴史に新たな光が射してきたと、記事は締めくくられています。



### 2012年度下半期 活動一覧

- 10月：写真展 & 講演会 (名古屋)  
「失われゆく南イタリアの中世壁画」
- 11月：本学「未来開拓研究公開シンポジウム」で  
宮下センター長が研究活動を発表
- ：伊 壁画修復士を招へい、「バック法による壁画洗浄」の  
講義・実習指導
- ：文化庁文化財部・奈良文化財研究所とワークショップ  
「壁画の保存・修復」
- 1月：2013年度実施の南伊プロジェクトに向けての現地調査
- 2-3月：写真展 & 講演会 (白山市)  
「ルネサンス美術の源流を求めて」

### 2012年8月-12月の報道記録

#### 《国内メディア》

- ▼「未来開拓研究公開シンポジウム」  
2012.10.11 / 11.2 北陸中日新聞  
2012.11.13 北國新聞
- ▼伊壁画修復プロジェクト「眠れる壁画の美女」  
2012.10.31 テレビ金沢
- ▼南伊中世壁画群診断調査プロジェクト  
2012.11.15 北陸中日新聞 / 北國新聞  
2012.11.19 毎日新聞
- ▼南伊プロジェクト展示コーナー設置  
2012.12.12 北國新聞

#### 《海外メディア》

- ▼グラヴィーナ・イン・プーリアで  
金沢大学が壁画調査  
2012.9.6 Gravina Life (伊)
- 2012.9.7 Quotidiano Italiano Bari (伊)
- 2012.10 Ali del Levante (伊)



[2013年写真展 &amp; 講演会]

入場無料・申込み不要

## ルネサンス美術の源流を求めて

共催：市民工房うるわし  
(JR松任駅前)

～南イタリアの中世洞窟教会群に描かれた壁画調査～

写真展：2月16日(土)～3月8日(金)

会場：市民工房うるわし 2階ロビー  
開場：10:00～17:30

講演会：3月2日(土)14:00～16:00

会場：市民工房うるわし 2階 常設展示室  
講師：宮下孝晴 金沢大学 人文学類教授  
フレスコ壁画研究センター長

ミケランジェロやラファエッロらの偉大な巨匠たちの傑作は、額縁に入った絵画ばかりでなく、広大な壁面や天井に描かれたフレスコ画にも見ることができます。むしろ、ダイナミックなイメージ構想を広大な壁面に展開したところにこそ、ルネサンス美術を創生した巨匠たちの真骨頂があると言えるでしょう。強烈な個性の発現、明るい画面、鮮やかな色調を可能にしたのは14世紀にフレスコ画法が完成したからにはかなりませんが、それは一朝一夕に完成したのではなく、長い試行錯誤の時代があつたことです。金沢大学フレスコ壁画研究センターの調査団は今、ジョット以前の中世にまで踏み込んでフレスコ壁画の継続的な調査研究を実施しています。

古代から中世にかけてのイタリアでは、新しい文化は南から北に伝播していたので、中世美術を研究するにはルネサンス美術のフィレンツェから南下して、南イタリアに注目しなければなりません。こうして金沢大学は歴史、芸術、医学、工学などの諸分野の研究者が協力してチームをつくり、南イタリアに数多く散在する中世の洞窟教会に描

かれた壁画の調査研究プロジェクトを2010年から開始しました。

これは2004年から2010年にかけて金沢大学が実施したフィレンツェのサンタ・クローチェ教会大礼拝堂壁画修復の日伊共同プロジェクトを継承発展させた大プロジェクトで、現在は高松塚古墳壁画やキトラ古墳壁画の修復保存の問題を抱えている文化庁の古墳壁画室や奈良文化財研究所とも連携協力して進めています。私たちは壁画技法としてのフレスコ画のルーツを探ると同時に、洞窟教会壁画を日本の最先端デジタル技術を利用して、(教会建築ともども)三次元で完全に記録するデジタルアーカイブを形成し、未来型の文化遺産保存法を提唱しているのです。

写真展では、南イタリアの洞窟教会での調査風景、各種の調査データを統合したデジタルアーカイブの実際をご覧いただきたいと思います。また、講演会では、博物館や美術館内に展示保存することの難しい「文化遺産としての壁画」をどのようにしたら未来へ伝えていくことができるかという問題をごいっしょに考えていきたいと思ひます。

## 連載

## フレスコ八景

## 第六景

西欧の建築は壮大で、壁面も大きく天井も高いから、いきおい壁面に描かれたフレスコ壁画は壮大であると思われがちである。しかし、小さな礼拝堂やタベルナクルム、書斎の壁や柱に描かれた「こぢんまり」した壁画の傑作も少なくない。今回はスタンダールの「パルムの僧院」で知られる北イタリアの「パルマの尼僧院」に、ルネサンスの画家コッレージョの作品を訪ねることにする。スタンダールに馴染みのない者でも、パルメザン・チーズ(パルミジャーノ)やパルマの生ハム(プロシュット・クルード)の産地と言えば身近に感じてもらえるだろうか。

パルマのサン・パオロ尼僧院長ジョヴァンナ・ピアチェンツァは1519年、長いローマ旅行から戻ったばかりの画家コッレージョ(1489頃-1534)に院長室の壁画装飾を依頼した。どのような尼僧院長であったかという下世話な想像はさておきとして、30歳のコッレージョは尼僧院長室を宮廷的な雅の華やぎと異教的なファンタジーに満ちたモチーフで演出している。大して広くはない部屋の天井いっばいに傘を広げたような、16本の放射状の梁で包み込み、全体を葦藁張りにして緑の植物を絡ませ、中央から梁間それぞれにフェストーネ(さまざまな果実を束ねた花綱装飾)を下げているのだが、天井高が低いために、すべてが触覚的リアルさに満ちている。この装飾的ロマンからは、同じ部屋の暖炉に貞潔の象徴である女神ディアナの姿を描かせながらも、やはりどこかに本質的な女性らしさを漂わせていたであろう尼僧院長



Photo: Takaharu Miyashita

の姿が浮かんでくる。

ところで、もしローマを訪れることがあれば、コッレージョがこの尼僧院長室の装飾プランにあたって直接に影響を受けたと思われるラファエッロの壁画、ヴィットラ・ファルネジーナの回廊天井に描かれた「プシュケのロッジャ」(1517)をご覧いただきたいと思う。キリスト教以前の古代異教世界が放つ「神聖な妖しさ」の魅力の源泉はここにあったかと、納得できるはずである。(宮下孝晴)

表紙：グラヴィーナ・ディ・リッジョ東教会壁画(グロッターリエ) 撮影：宮下 孝晴

Centro  
Affresco



金沢大学人間社会研究域フレスコ壁画研究センターニューズレター(年2回発行)

編集発行 金沢大学 フレスコ壁画研究センター

〒920-1192 金沢市角間町 金沢大学人間社会研究域

電話(076)264-5550/5472 Eメール fresco@ed.kanazawa-u.ac.jp

http://www.adm.kanazawa-u.ac.jp/fresco/index.html

定期的にニューズレター郵送をご希望の方は、お名前ご住所と連絡可能な電話番号またはe-mailアドレスを添えてご連絡ください。本ニューズレターの内容を無断転載することを禁じます